

『ユニコーン』における不思議な魅力を持つデニスについての考察

石本弘子

『ユニコーン』はアイリス・マードックの7作目の小説で、物語は荒涼たる風景描写で始まり、息もつかないほどの速さで、読者が予想もつかないような展開をする。読者は人里離れたゲイズ邸の女主人公ハナとハナを囲む個性的な登場人物の世界へ強い力で引き込まれる。何回か読んでいくうちに、私はハナに献身的に仕える下僕のデニスに強く興味を惹かれるようになった。

デニスには不思議な魅力があり、ハナの良き理解者であると同時にエンディングではハナのためにハナの夫ピーターを殺害するという行動をとった。最後にはその罪を購うためにゲイズ邸を去り、ハナの代理人となりハナの罪を背負い、一人の脇役から別格へと昇進した。

デニスはハナの家教師マリアンの目を通して描かれている。マリアンのデニスに対する第一印象は良くなかったが、彼がハナの髪の毛を切る場面で印象が変わり、最終的には恋に落ちてしまう。養魚場でデニスは「苦しむのは不名誉なことではなく自然なことで、自然は苦しむことを命じている。創造物は創造されたこと自体に苦しみ、神から引き離されたことに苦しむのだ。」と述べている。このようなデニスの創造物の苦悩への理解や共感から、彼が敬虔なキリスト教徒だとわかる。「デニスは造物主と霊的な交わりを結んでいる」と室谷洋三先生はアイリス・マードック：イギリス文学作品論の中で述べている。

また、デニスがハナをキリストとして崇拜している箇所が随所に窺われる。マードックもハナをキリストだと示唆している。マードックがハナの苗字を計画的に Christ-name の anagram の Crean-Smith としたことや、この本のタイトルに The Unicorn とつけたことから、ハナがキリストであり自己犠牲を伴う受難を被ることが予測できる。

ところが、ハナに対する見解は登場人物によっ

ても様々であり、デニスとマリアンにも見解の違いがある。デニスはハナが善良であり、彼女の幽閉は瞑想の人生と関係していると信じ、ハナを真の自発的な瞑想者だとみている。ところがマリアンはハナが他の必要や圧迫により、瞑想の世界に無理やり入れられたとみている。

ハナとデニスは隣人の老哲学者マックスの思想を共有している。ハナとデニスは根本的な思想に共通点があったので、デニスはハナのことを理解できたのだと思う。創造物が神から切り離された苦しみや愛を切望する様子はハナを通して、物語の中で随所に描かれているので、ハナの神への信仰心はよく理解できる。

またデニスには不思議な能力や魅力がある。動物に溢れんばかりの愛情を注ぎ、上手に世話をし動物からも懐かれ、フランス語ができるほど教養もあり、さらにピアノも弾き、歌を歌わせれば、ハナが感極まって号泣するほどだ。それから、透明人間だと言う噂や妖精の血を引くという現実離れをした噂もある。殊に彼の人を助ける能力は注目に値する。

この小説ではマジックナンバーの seven が神話的な意味を持っている。『ユニコーン』の Chapter 7 で seven に纏わる話をマードックは意図的に組み入れたと考えられる。

ハナがジェラルドに身を任せ自己破滅した事件で、デニスはハナに幻滅し、マリアンも複雑な気持ちになる。不意に訪れた解放感からマリアンはデニスを誘惑し、肉体関係を結んでしまう。マリアンはこれまで経験したことのない恋だと思いつつも、デニスはハナを通してマリアンをみていたので、本当にマリアンを愛していないことを冷静に受け止めている。

最後に善良なデニスが悪は悪を持って戦うと決めて、ハナの夫を故意に溺死させてしまう。この行為は決して許されないが、デニスはハナの代理

人になり、罪を背負い、持ち去った。「この罪を
購うためには、デニスは自分の誤りを認め、本当
の一角獣になるしか方法はない。即ち、本当に相
手の立場になって考える以外に道はない。」と室
谷洋三先生は述べている。今後デニスは自分の罪

を誰にも語ることなく、ひっそりと暮らし、ひた
すら罪を背負うことによって、ますます威厳に満
ち、神秘的な人間になるだろう。

(会員)